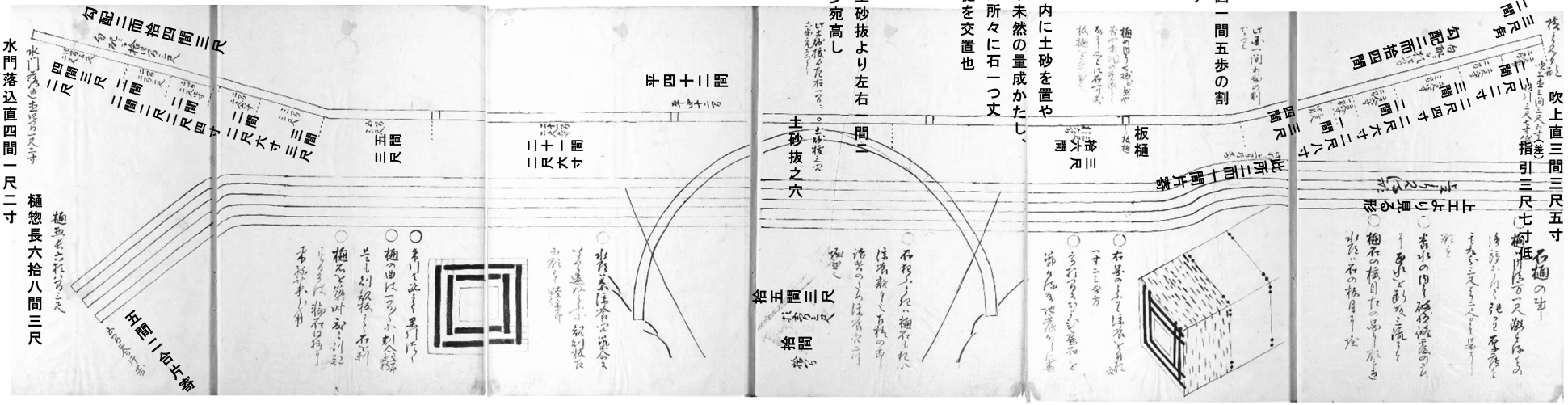
（挿絵十八）



石樋の事

○樋ハ内法方一尺、激することの強弱によつて、張りわ厚薄す、其取分三尺より二尺まて、図に顕す、

○養水の内に破損修覆のために通水を断故、三流にす、

○樋石の接目、左の図に顕す通、水道ハ石の板目に堀、

○右図のとふり漆喰を用る穴一寸二、三歩方

○高拾間におよひ裏石を築ける故、地震なとに裏

○（ママ）石狂ふときハ、樋石も狂い漆喰離るゝ也、左様の節、詰替のため漆喰穴二ツ堀置也、

○水道ハ素、漆喰穴築合にいたり違ぬよふに、規則板、左に顕す、（大工宗十郎作之）

○朱引者跡にて黒引つく、

○樋の曲は、一間々々に割合（ママ）是も則規板にて石を剥、（宗十郎受持）

○樋石を築時、度々剥（離カ）難するには、輪石同様に束ね藁を用、

漆喰の事

前文の通り種々様々の試、一つとして行れかたく、後道の仕法、左のことし

土五合

干て能乾たるを合する事、豊後府内初瀬井手之伝なり、

坂梨某選られしに、初瀬流の干土、臼にて搗、ふるひを通たるよし、夫故歟、三十年も経て灰気替らぬとの事也、よつて土は、漆喰に用来る上段を選、干て臼搗ふるひを通す、

白灰弐升

焼灰拾月を過しハ、灰気もとり不宜、故に日数五十日位に成るを用との儀、御左官手の説によつ（ママ）、焼立五十日位を用、

砂壱升八合

水源遠く急流の洲にて取、塊の交や否ヤハ桶にてとき、汁にこりなきときハ真の砂也、夫を用、是も御左官手の説也、

塩壱合

松葉汁

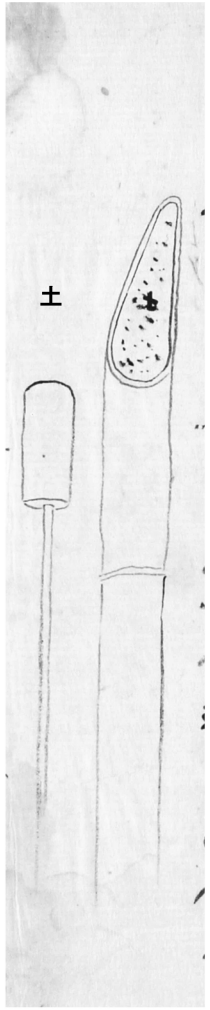
二日計煮る

右の品々搗合、二日二夜計寝セ、猶搗て日に当乾し、もミくたき紛に成りたるを手一つはい握り堅め、手をゆるめたるに、三ツ四つにも割るゝ位のしめりを用、（火術流星筒詰の仕法）

○時候ハ四月・八月上時と御左官手の説也、

○詰よふハ右の土乾き過ぬよふ風気を防き、鶏卵半分たけ位入、槌数七十計たゝく、打様強弱なきよふにすること第一也、樋の漆喰穴土を入るゝ道具、左に顕、

（挿絵十九）



図のとふりそぎ口に土を入、詰口に指（差）入、送り棒にて搗出す、

○破れ樋詰替ハ三ツ俣のきり、手元ニしもくをはめていきるなり、一日に漸一筋もいきり通す也、

大石運送之事

車も肩持も道の善悪による故、高三尺より後、道十一間まて三十一扁丸木詰にて、道幅五尺程の板敷、上エにはねこふく懸（是を司る事、五兵衛）八重なんハ、其外種々手を替運送するよし、積り肩持弁利なり、付て牛といふ（俣木を以て拵）のと、六ツ車（五兵衛巧也）を専用、

築石　長三尺、方一尺八寸已上　　同　長二尺五寸、方一尺七寸已上
同　長二尺、方一尺五寸已上　　長一尺五寸、方一尺
輪石
隅石　長五尺、方一尺八寸
樋石　三尺方ニ而厚二尺

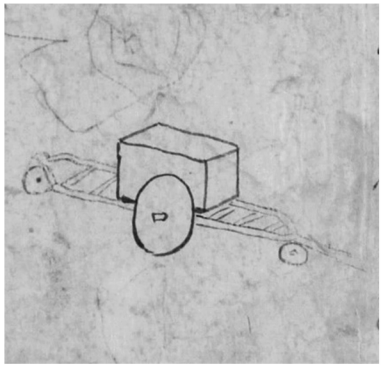
右の類、肩持には桧五寸角、二間半、夫れに小丸木添、

○牛といふ道具、左ニ顕す、

（挿絵二十）

○六つ車、左の図とふり

（挿絵二十一）



前後の小車にて頭を突込むにも却而走り後に当る也、

【史料二】石碑「通潤橋」

（正面）

通潤橋　　岩﨑清蔵
　　彌太郎
　　甲斐清兵衛

（裏面）

嘉永五年壬子十二月起功　郡代　上妻半右衛門
安政元年甲寅八月成　　惣庄屋　布田保之助
　　手附横目　石原夫兵衛
　　同　　石坂禎之助
　　塘方助役　間部市太郎

井手下村役員
畑村　宗七
　繁右衛門
　新左衛門
小原村　齋助
　儀助
　文助
長野村　圓助
　榮七
田吉村　藤七
　九助
　喜助
新藤村　源助
　桂七
　九右衛門
　喜助
小ヶ蔵村　藤助
　林左衛門
白石村　嘉兵衛
　渡邉両助
犬飼村　藤七
　圓七

【史料三】石碑「通潤橋建築中勉勤之名」

（一段目北面）

通潤橋
建築中
勉勤之銘

会所手代
修築中用掛　高橋文次
同副　工藤宗次郎
修築中惣豁　佐野一郎右衛門
　石原平次郎
水道開拓惣豁　佐藤傳兵衛
　本田仁一郎
同用掛　渡邉半左衛門
　井手仁三助
　猪左衛門

（一段目西面）

宗八
源左衛門
新兵衛
文助
嘉平次
牧野村　惣右衛門

（一段目南面）

井手下庄屋に而
修築用掛　原田平右衛門
　渡邊太郎兵衛
井手下庄屋　原田理兵衛

（二段目西面）

通潤橋建築石工頭
　矢部小野尻村　宇一
同副頭
　八代種山　丈八
副並

種山　甚平　芦北　虎吉

（二段目北面）

同　榮七
同　岩吉
矢部　善七
菅尾　繁八
中山　庄平
同　直八
同　永八
砥用　傳八
木倉　嘉次衛門
同　半助
石工
矢部　惣左衛門
同　銀兵衛
同　九平
同　新左衛門
天草　惣五郎
同　源兵衛
同　亦右衛門
同　小平
甲佐　善右衛門
同　庄八
種山　善七
同　直助
同　丈作
同　次平
同　甚作
同　伊勢松
中山　久平
同　加左衛門
豊後　岩吉

（二段目東面）

砥用　庄左衛門
同　佐兵衛
木倉　両助
河江　身助
同　多十郎

（二段目南面）

野津原　喜太郎
熊本　鉄次郎
同　徳次郎
修築石運輸頭
高田　勝平
高瀬　四郎助
熊本　吉平
同　又八
同　芳右衛門
同　舛平
同　圓右衛門
同　伊八
同　猪之吉
台築番匠頭
矢部藤木村　茂助
用掛番匠頭
矢部小原村　宗十郎
同津留村　五兵衛
井手條石工受負頭
田浦　勝平
矢部　久五郎
種山　祐助
同　杢蔵
井手築土手受負頭
天草　林助
同　榮八
矢部　新七
同　佐右衛門
貞八
阿蘇　兵右衛門

【史料四】（「南手新井手記録」【6】）

※欠損箇所は、笹原侊介『自治之龜鑑 爲政之權化 布田保之助惟暉翁傳』（昭和十三年、布田翁遺徳顕彰会）をもとに補った。

奉願覚

一、新井手間数壱万六千八百六拾八間五合

六千七拾四間五合　本井手
五千六百三拾七間　分水井手九ヶ所
五千百五拾七間　下タ井手五筋

但、南手在之内、小原・長野・田吉・犬飼・新藤・白石・小ヶ蔵七ヶ村并畑村、都合八ヶ村、笹原より愛藤寺迄新井手御普請奉願候分、

［欠損］［此御入］目銭三百弐拾七貫七百三拾弐匁九分

但、御普請銭并諸御入目銭共ニ積前分、

［欠損］［此田開］畝四拾弐町壱反壱畝弐拾七歩

但、上畝物并畝物開奉願候本畑、且の［野］開、御山薮・空地之儀者延畝廿割之見撫を以、上畝物込之積合せ共ニ本行之通、

八町　成切初年ニ開明可申分
八町　二ヶ年目右同断
八町　三ヶ年目右同断
八町　四ヶ年目右同断
拾町弐反壱畝廿七分　五ヶ年目右同断

但、開明可申畝数年之［ニカ］寄増減者可有御座候得共、右之見渡を以五ヶ年ニ全開明可申分、

此徳米百弐拾六石六斗五升七合

但、御本地畑撫反ニの［野］開・御山薮・空地床之儀、上畝倍込之畝数積ニ撫反三斗上納可仕候、右開明之儀、御本地畑迄申候而茂平面少、多片下り有之候ニ付、肥土者一旦堀寄置、底土を以地撫仕候而、肥土を持入候ニ付、開夫之費多、竹木草立等者山々片下り之処ニ付、猶更手入多、深堀候処者靄觜を仕イ候ニ付、開之手入強、殊ニ無毛之地者底土堀返候ニ付、地味折合可申儀間遠御座候候間、御本畑・の［野］開・空地等共ニ、撫四ヶ年無徳、五ヶ年目より上徳米上納被仰付被下候様奉願候、

五石九升弐合壱勺三才

但、費地御償米

残百弐拾壱石弐斗六升四合八勺七才

但、御銭百目ニ付上納可仕徳米三升七合ニ相当り申候、

［欠損］［右］者矢部手永南手在と唱候内、右村々之儀、［欠損］［山野］之地形網目之様ニ有之、一躰者南下り［欠損］［之土地］ニ御座候得共、東者五老ヶ瀧川、南者緑［欠損］［川、西者］千瀧川ニ而谷深、川之左右者岩山［欠損］［数十丈］峙居、北者五老ヶ瀧川之間濱町ニ而、［欠損］［拾間余］之低有之、四方川懸之水脈を断［欠損］［居候］ニ付、田方者狭キ谷々ニ而、多其ヶ所々々之［欠損］［出］水を以養候ニ付、犬飼・白石者畑勝ニ有之、右両村并長野三ヶ村者千田所茂有之、右七ヶ村并畑村共ニ八ヶ村之田方谷頭之坪々者至而小せまちニ而壱坪並程之狭谷ニ而広平一円之地面者少、古田六拾町之内田吉村畑ニ而麦地七町有之、小原列六ヶ村ニ而者八反外無御座候、其外者一毛作ニ而、右之通之地面御本方田一扁程ニ有之、諸畝物田弐町三反外無御座、彼是不釣合ニ御座候故歟、長野・愛藤寺者旧来之零落所ニ而種々之御仕法被附下候得共、于今成立之期茂［欠損］［見］エ兼奉当惑候、右之次第ニ付、年来［欠損］［上畝］仕立之願望ニ御座候処、文政度御取［欠損］［懸に］相成、其後取畳被仰付置候砥用［欠損］［手永］上畝物御仕立之新井手、大略拾［欠損］［里程］内、井手口壱里余之処、七八分出［欠損］［来］仕居、右之井手急流之積、直井手を上ケ候而茂井手口岩丁場五六百間之内、過半無取用、其以下者全堀替候得者、南手境五老ヶ瀧上ニ至り、川並より直立十六間上エニ井手立ニ相成、双方之山合ニくゝり居候所ニ而、台共ニ高十壱間四合之目鑑を懸ケ、其上ニ四間六合石樋吹上を［欠損］居［欠損］候得者、南手之山ニ水を移之儀、川並より十六間高相成、南手持口小原・長の［野］ニ而者山々半